

第1章

消費者行動理論

私たち消費者は、限られた予算の中で、自身の満足度が最大になるような買い物をしたいと思っている。これを最適消費計画という。では、どのようにすればそれが実現できるのか。ここでは、その鍵となる無差別曲線と予算制約線などについて学んでいく。

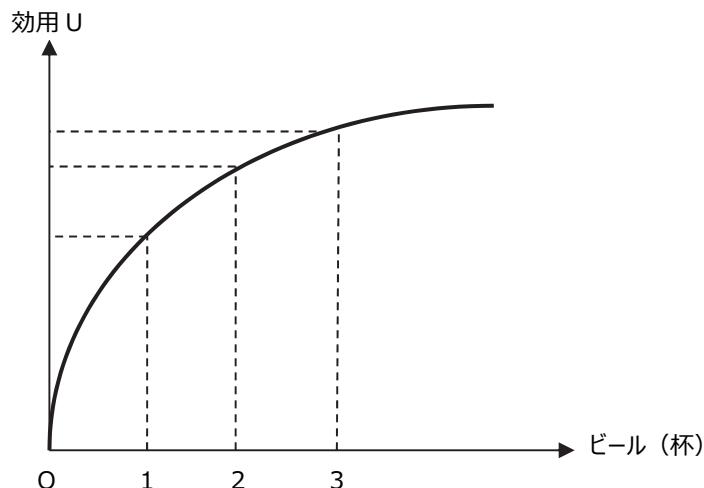
第1節 最適消費計画

効用関数

消費者が財を消費したことで得られる個人的な満足感のことを「効用」(Utility) という。効用は、財の消費量が増えるに従って増加するが、その増加幅は徐々に減っていく。例えば、炎天下で喉が渇いているときのビールを想像してみよう。1杯目に飲むビールは感動するほど美味しい。続いて2杯目も美味しいが1杯目ほどではない。3杯目になると、2杯目よりもさらにありがたみは落ちる。

このように、同じ1杯のビールを飲んだ場合でも、満足度は徐々に減っていく。これを「限界効用遞減の法則」という。限界というのは、財が1単位増えたときの、ある要素の増加分のことである。ここでは、ビール（財）を1杯追加で飲んだときの満足度（効用）は、徐々に減っていく（遞減する）ことを意味している。

この満足度（効用）をグラフで表すと、以下の図のようになる。これを効用関数という。



限界効用は、この効用関数上の点の接線の傾きで表される。

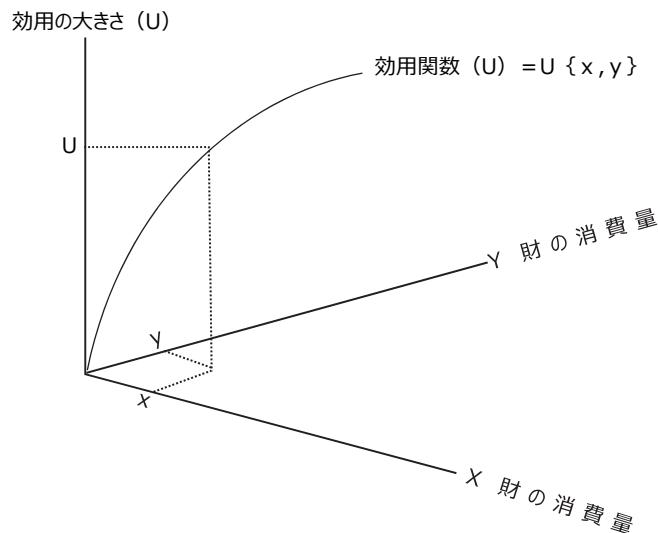
限界効用が遞減するということは、消費量が増えるに従って、徐々に接線の傾きが緩やかになることを指す。

- ◆ 「限界」とは、財が 1 単位増えたときの、ある要素の増加分のことである。
- ◆ 「限界」は、接線の傾きで表される。
- ◆ 接線の傾きが徐々に緩やかになることを「遞減」という。
- ◆ 限界効用は、遞減する。(接線の傾きは徐々に緩やかになる)

上記の効用のグラフは 1 財の場合だが、試験では主に 2 財の効用関数が提示される。なお、2 財以上の効用関数の場合、グラフは 3 次元となるため、出題される場合は無差別曲線という形で表されることになる。

無差別曲線

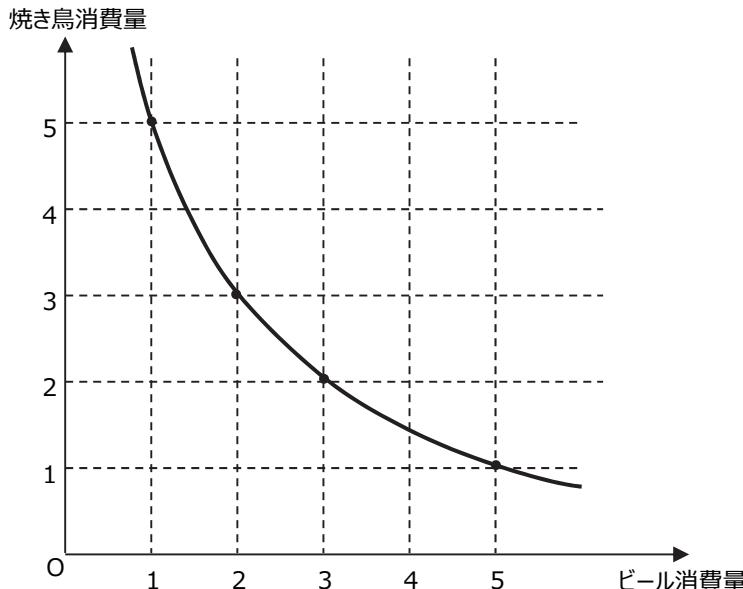
無差別曲線とは、2 財で作られる立体的な効用関数を、ある一定の効用において水平に輪切りにしたものである。



具体例で見てみよう。先ほどは、ビールという 1 つの商品（財）で得られる効用を見た。では、ここでビールと焼き鳥という「2 つの財の組み合せ」で見ることにする。ある消費者にとって、ビールと焼き鳥を同時に消費した場合に、同じ満足度（効用）が得られる組み合わせが以下の通りであったとする。

ビール消費量	1 杯	2 杯	3 杯	5 杯
焼き鳥消費量	5 本	3 本	2 本	1 本

これをグラフに表すと以下のようになる。



このように、2つの財を同時に消費し、同じ効用となる組み合わせを結んだ曲線を「無差別曲線」という。無差別とは Indifference (異なる) の訳であり、「同じ」であることを意味している。

一般的な無差別曲線には、以下のような性質がある。

- ① 右下がりである
- ② 右上ほど高い効用を表す
- ③ 原点に対して凸である
- ④ 交わらない
- ⑤ 序数的効用を表す

※例外的な無差別曲線については後で学ぶ

① 右下がりである (財の代替性)

一方の財を減少させて効用が減少しても、他方の財を増加させることで、元の効用水準を維持することができる。この性質を、財の代替性という。この性質により、無差別曲線は右下がりとなる。

② 右上ほど高い効用を表す

財の消費量が多いほど消費者の効用は増加するため、右上に位置する無差別曲線ほど高い効用を表す。